

## 中学生における自尊心と被受容感からみた ストレス反応・本来感の検討<sup>1)</sup>

筑波大学大学院人間総合科学研究科 鈴木 真吾

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系 小川 俊樹

An Investigation of Stress Responses and Sense of Authenticity in Junior High School Students from the Perspectives of Self-esteem and Sense of Being Accepted

Shingo Suzuki and Toshiki Ogawa (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, 305-8572, Japan*)

This study investigates the characteristics of high unhealthy self-esteem (defensive self-esteem) in terms of adjustment in adolescents. A total of 548 junior high school students participated in a questionnaire survey. The participants were divided into four groups according to their levels of self-esteem (SE) and sense of being accepted (SBA): (1) High SE-High SBA (HH), (2) Low SE-Low SBA (LL), (3) High SE-Low SBA (HL), and (4) Low SE-High SBA (LH). The relations between stress response levels and sense of authenticity were examined across the four groups. The results indicated that the HH group has good mental health, while the LL group has poor mental health. In the HL and the LH groups, where there are imbalances between the levels of SE and SBA, the level of sense of authenticity is lower than in the HH group. Moreover, the levels of stress responses for the HL and LH groups were partially higher. These findings suggest that adolescents with imbalances in their levels of SE and SBA have peculiar forms of maladjustment, and that such individuals are important for investigating defensive SE.

**Key words:** self-esteem, sense of being accepted, adolescent adjustment

### 問題と目的

適応を理解する重要な概念のひとつに自尊心がある。一般に自尊心の高さは精神的健康と関連し、自尊心の低さは様々な問題行動と関連する(伊藤, 2002)と考えられてきた。

ところが近年、中学生において高い自尊心が不適応と関連することを示唆する報告がある。例えば本間(2003)は、いじめ加害を長く継続すると自己報告した中学生の自尊心が高いことを確認している。

また楡木(2005)は、反社会的逸脱への憧れが強い中学生の自尊心は高いことを見出している。

自尊心と適応との関連については、その実証結果が一貫していない(遠藤, 1999)という見解がある。Dubois & Tevendale(1999)は思春期を対象に自尊心と適応指標との関連を検証した研究を概観した。そこで、同一の変数であっても(例えば、学業成績や抑うつ、非行など)、自尊心と関連があったとした研究と、関連がないとする研究の両方が確認できたことと報告している。すなわち、高い自尊心には、適応につながるという見解とともに、不適応を導くという、研究間に矛盾が見られるのである。自尊心の向上は適応につながるという前提は、暗黙のうち

1) 本論文は日本パーソナリティ心理学会第14回大会にて発表したものを再分析して加筆修正したものである。

に支持されているように思われるが、実際には、自尊心と適応との関連はいまだ不明確な点が残されている。

そのような中、Salmivalli (2001) や Baumeister, Campbell, Krueger & Vohs (2003) は、高い自尊心には真に健康的なもの (genuine, healthy) と、防衛的で不健康なもの (defensive, unhealthy) があり、その両者を区別することが重要だという理論を提起している。つまり自尊心が適応に益をもたらすか否かの二者択一の理論ではなく、同水準の高い自尊心であっても、適応的な効果をもつものと、不適応的な効果をもつものが質的に混在しているという指摘である。

防衛的な自尊心を区別するために、例えば、自尊心の水準と、自尊心の安定性 (Kernis, Cornel, Sun, Berry & Harlow, 1993; 松原・藤生, 2005) を別個のものとして考慮する手法や、他者評価を用いて、自尊心の質を区別する方法 (井上, 1986; Salmivalli, Kaukiainen, Kaistaniemi & lagerspetz, 1999) など、いくつかの視点が考案されている。

その結果、自尊心が高く不安定な中学生は、仲間評定による攻撃行動が高いこと (松原・藤生, 2005) や、教師の評価が低いにも関わらず高い自尊心をもつ児童は、学業成績が低くクラスメートの評価も低い (井上, 1986) ことが示唆されている。しかし一方では、いじめ加害行動の傾向が高い中学生は、自己評価と他者評価がともに高い男子であったとの報告 (Salmivalli ら, 1999) もある。また大学生を対象に、自尊心の水準と安定性を組み合わせて攻撃性との関連を検討した清水 (1999) の研究では、安定性と攻撃性に関連は見られなかった。

このように、自尊心と適応との関連を検討するために様々な方法が試みられている中で、自尊心の質を区別する研究的意義が明らかになりつつあるが、高く防衛的な自尊心と不適応との関連を検討した結果はいまだ一致していない。そもそも本邦では自尊心の質を区別して適応との関連を検討した実証的研究自体が少ない現状である。

木村・宮本 (1999) は、自己肯定度と反映的自己 (友人やクラスでの適応感を表す概念) の水準に不一致が見られる児童を観察している。そこでは、反映的自己は低い而自己肯定度が高い傾向にある児童は、粗暴で衝動的な行動があり自己中心さが見られると観察されている。この研究では反映的自己は高い而自己肯定度は低い児童も観察されており、仲間からの信頼は得ているが対人関係に敏感な子と述べられている。この知見から、自尊心と人間関係での適応感の水準、その不一致に着目することで、自尊

心と不適応との関連をより明らかにできる可能性が考えられる。

理論的にも、自尊心と適応との関連を、適応理論に基づいて考えることができる。適応とはその基本原則として、内外適応、つまり自己と環境との関係で折り合いをつけること (福島, 1989) とされる。そして人の適応を理解する場合、外的適応・環境とは人間関係と同義 (北村, 1965) だといわれている。人間関係での適応を包括的に捉えた感覚は、とりわけ他者からの受容感が考えられる。

遠藤 (1999) によれば、自尊心とは自分だけを考えてその価値を見出すものであり、他者や社会との関わりにおいて見出される価値の感覚は含んでいないものとなる。つまり、自尊心の質と適応・不適応との関連とは、自尊心と他者からの受容感との折り合いが付いているかどうか、という見地から理論的に検討することができると考えられる。ここでいう折り合いとは、自尊心と他者からの受容感の水準が一致しているかどうかを意味する。

したがって、本研究では自尊心と他者からの受容感の水準という2要因から4つの類型を設定し、自尊心の質、つまり防衛的な自尊心と適応・不適応との関連をより明確にする実証的検討を行うことを目的とする。類型は自尊心と他者からの受容感の水準が一致した、両者がともに高い群と低い群に加えて、水準の一致していない、自尊心は高いが他者からの受容感の低い群、そして他者からの受容感が高いが自尊心は低い群の、以上4群を設定する。

上記4群の特徴を検討するために、ストレス反応、本来感の2変数を用いた。ストレス反応は、中学生のメンタルヘルスや学校不適応の予防に有効だと期待されている (三浦, 2006) 適応指標である。自尊心と他者からの受容感によって、防衛的な自尊心が区別できたならば、4群に適応状態の違いが示されなくてはならない。そこで4群の基本的な特徴を検討するために、代表的な適応指標のひとつであるストレス反応を用いることにした。これまでの研究知見を踏まえて、自尊心と他者からの受容感がともに高い群ではストレスも低く、自尊心と被受容感がともに低い群ではストレスも高いと考えられる。そして自尊心と被受容感の水準に不一致がある2群ではストレスは高くなるだろう。

また、本来感とは、“いわゆる自分らしさの感覚”を指す (伊藤・小玉, 2005) 構成概念である。防衛的な自分を持っていると自分がないという感覚が強くなる (北山・舛田, 2006) といわれている。自尊心と他者からの受容感の水準が一致しない防衛的な2群では、自分らしさの感覚が低いと推測される。

本研究の目的をまとめると、自尊心の質から防衛的な自尊心を区別して適応・不適応との関連をより明確にするために、他者からの受容感を組み合わせた4類型を設定する。そして、自尊心と他者からの受容感の水準が不一致な2群は不適応的な特徴を示し、かつそれは自尊心と他者からの受容感がともに高い・低い群とは異なるという仮説を検討するものである。

### 予備検討

自尊心を測定する尺度は数多いが、既存の尺度には妥当性に問題が残されている(榎本・田中, 2006)と指摘されている。また自己受容などの近縁概念を測定する尺度を確認すると、尺度項目に自尊心や自己関連概念間で類似の内容が見られることがある。

そこで調査に先立ち自尊心の尺度項目の内容について精選を行った。先行研究より自尊心・自己受容・有能感・自己愛を示すとされた項目に独自に作成した項目を加えて、計117個(星野, 1970; 田中・上地・市村, 2003; 山本・松井・山成, 1982; 宮沢, 1988; 溝上, 1999; 小塩, 1998 なお前者3つはRosenberg, 1965の異なる邦訳版である)を収集した。次に臨床心理学の専門課程に所属する大学院生8名の協力を得て、自尊心・自己受容・有能感・自己愛それぞれの概念定義を教示した後に、定義が該当すると思われる項目には複数回答可で全項目の内容確認を依頼した。自尊心の定義を、「自分自身を自分の感覚・基準に根ざした上で肯定的に感じられている感情」とし、この定義のみに該当するとされた項目を選択し、7項目の自尊心尺度案を作成した。

次に他者からの受容感を測定する尺度について検討した。他者からの受容感には孤独感や疎外感、被受容感などのいくつかの近縁概念が確認できる。これら概念を測定する尺度項目では、内容に重複が見られる。そこで、他者からの受容感についても先行研究から関連する項目を集め、独自に作成した項目も含めて計42個を収集した(三浦・原岡, 2002; 宮下・小林, 1981; 落合, 1983; 杉山, 2002)。そして自尊心尺度と同様の手続きで項目の精選を行った。他者からの受容感の定義を、「自分是人から受け入れられている、人とつながっているということに根ざした肯定的な感情」とし、この定義に該当すると選択された7項目が採択された。これを被受容感<sup>2)</sup>尺度案とした。

## 方 法

### 1. 調査対象

関東圏の公立中学校1校の1～3年生を調査対象とした。分析対象は回答に不備のあった者を除いた548名(男子274名, 女子274名, 年齢13.18歳,  $SD = 0.90$ )であった。

### 2. 調査手続き

2005年5月に質問紙調査を行った。質問紙、実施方法の説明を学校に郵送し、担任教師によるクラスごとの実施を依頼した。

### 3. 調査尺度

1) **自尊心尺度** 予備検討で作成した尺度案を用いた。7項目で「あてはまる」から「あてはまらない」の5件法。

2) **被受容感尺度** 予備検討で作成した尺度案を用いた。7項目で「あてはまる」から「あてはまらない」の5件法。

3) **ストレス反応尺度**(岡安・高山, 1999) 身体的症状、抑うつ・不安感情、無力感、不機嫌・怒り感情の4因子からなる。各4項目で「まったくあてはまらない」「少しあてはまる」「かなりあてはまる」「ひじょうにあてはまる」の4件法。

4) **本来感尺度**(伊藤・小玉, 2005) 自分らしくある感覚を測定する単因子で構成される。7項目で「あてはまる」から「あてはまらない」の5件法。

## 結 果

### 1. 尺度の分析

1次元構造を仮定し、自尊心尺度案7項目に対し逆転項目を処理した上で主成分分析を行った。まず負荷量が.24と非常に低かった質問項目「もう少し自分を尊敬できたらいいと思う」を除き、再度

2) 他者からの受容感という語句表現は、特定の他者の存在を前提とする概念だと誤解を招く恐れがある。本研究では特定の他者に限定せず、「広く、人および社会から受け入れられている」ことを前提としており、それを適切に表現する用語が必要と考えた。

被受容感とは、杉山(2002)が「自分は他者から一定の暖かさや承認を持って大切に扱われている認識および情緒」と定義・提案した用語である。被受容感という語句表現は、孤独感や疎外感などの否定的ニュアンスをもつ近縁概念に比べて、本研究が意図した他者からの受容感という概念をより適切で分かりやすく表現できると思われた。そこで、杉山(2002)とは厳密には定義と項目が異なるが、被受容感という用語を採用して、以下の検討を行うことにした。

同様の方法で主成分分析を行った (Table 1)。その結果から第1主成分は全ての項目が.40以上の負荷量を持ち、単因子としてのまとまりのよいことが確認された。信頼性を検討したところ、 $\alpha = .85$ と十分な内的整合性も確認された。以上より6項目をもって自尊心尺度を構成した。

被受容感尺度案7項目についても、1次元構造を仮定し、主成分分析を行った (Table 2)。その結果から第1主成分は全ての項目が.40以上の負荷量を持ち、単因子としてのまとまりのよいことが確認された。信頼性の検討についても、 $\alpha = .88$ と十分な内的整合性が確認された。そこで、7項目全てを採

用して被受容感尺度を構成した。

ストレス反応尺度16項目については主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った (Table 3)。結果、先行研究と同様の因子構造が確認された。そこで16項目全てを採用し、その内、第1因子を「不機嫌・怒り感情」、第2因子を「抑うつ・不安感情」、第3因子を「無力感」、第4因子を「身体的症状」と先行研究と同じように名づけた。各因子の信頼性を検討したところ、第1因子「不機嫌・怒り感情」で $\alpha = .86$ 、第2因子「抑うつ・不安感情」で $\alpha = .83$ 、第3因子「無力感」で $\alpha = .78$ 、第4因子「身体的症状」で $\alpha = .75$ となっており、十分な

Table 1 自尊心尺度の主成分分析

質問項目	負荷量
私はだいたいにおいて現在の自分が好きです	.835
私は自分にだいたいは満足しています	.832
私は現在の自分に満足しています	.791
私は生きていてよかったなと思う	.750
私は生まれてきてよかったなと思う	.723
私は自分に対して肯定的です	.601
	固有値 3.46
	寄与率 57.69

Table 2 被受容感尺度の主成分分析

質問項目	負荷量
みんなあたにかい心で私をむかえいれてくれるように思う	.832
私は周りから受け入れられていると思う	.823
私は周りから大切にされていると思う	.787
私は周りから理解されていると思う	.774
私は優しい人に囲まれて1人ではないと思う	.751
私は人とつながっていると思っている	.721
私の考えや感じを何人かの人は分かってくれると思う	.714
	固有値 4.18
	寄与率 59.74

Table 3 ストレス反応尺度の因子分析

質問項目	I	II	III	IV	共通性
第1因子 不機嫌・怒り感情					
いかりを感じる	.967	-.028	-.055	-.057	.807
はらだたしい気分だ	.790	.116	.008	-.103	.645
いらいらする	.716	-.081	.033	.170	.640
だれかに、いかりをぶつけたい	.662	.017	.027	.027	.491
第2因子 抑うつ・不安感情					
悲しい	-.030	.874	-.039	.009	.717
泣きたい気分だ	.047	.858	.040	-.193	.639
さみしい気持ちだ	.023	.629	-.080	.249	.598
心が暗い	-.029	.418	.129	.262	.457
第3因子 無力感					
勉強が手につかない	-.124	-.046	.781	.060	.563
むずかしいことを考えることができない	.018	.032	.735	-.090	.493
ひとつのことに集中できない	.093	-.045	.734	-.031	.548
根気がない	.065	.102	.429	.133	.389
第4因子 身体的症状					
体がだるい	.052	-.121	-.031	.854	.640
よくねむれない	-.109	-.003	-.010	.627	.316
つかれやすい	.066	.030	.115	.608	.559
頭がいたい	.049	.108	-.044	.489	.317

内的整合性のあることが確認された。

そして本来感尺度7項目について、先行研究にない1次元構造を仮定し、逆転項目を処理した上で主成分分析を行った。まず負荷量が.23と非常に低かった質問項目「他人と自分を比べて落ち込むことが多い」を除き、再度同様の方法で主成分分析を行った (Table 4)。その結果から第1主成分は全ての項目が.40以上の負荷量を持ち、単因子としてのまとまりのよいことが確認された。信頼性を検討したところ、 $\alpha = .83$ と十分な内的整合性も確認された。以上より、6項目をもって尺度を構成した。

自尊心と被受容感の尺度については、素点合計を尺度項目数で除した、項目得点をもって以後の分析に用いた。したがって得点範囲は1～5点であった。結果、自尊心尺度は平均値3.58,  $SD = .75$ であった。被受容感尺度では平均値3.62,  $SD = .67$ であった。

ストレス反応尺度は合計得点を用いた。したがって、ストレス反応は各因子ともに得点範囲は4～16点であった。本来感尺度は素点合計を尺度項目数で除した、項目得点を用いた。項目得点は1～5点であった。

Table 4 本来感尺度の主成分分析

質問項目	負荷量
いつも自分を見失わないでいられる	.793
いつも自分らしくいられる	.774
いつも揺るがない「自分」をもっている	.756
これが自分だ、と実感できるものがある	.752
人前でもありのままの自分が出せる	.713
自分のやりたいことをやることができる	.658
	固有値 3.30
	寄与率 55.08

## 2. 尺度間の相関

自尊心尺度、被受容感尺度、ストレス反応尺度の各因子、本来感尺度について、Pearsonの積率相関係数を求めた (Table 5)。自尊心尺度、被受容感尺度とストレス反応尺度の各因子との間ではおおむね弱い負の相関関係が見られた。さらに自尊心尺度と被受容感尺度、そして本来感尺度との間には強い正の相関関係が認められた。

## 3. 自尊心と被受容感による群分け

自尊心、被受容感ともに項目得点を用い、次のように分類を行った。自尊心の項目得点の平均値+0.5SD (3.95)以上を高水準、平均値-0.5SD (3.21)以下を低水準とした。被受容感も項目得点の平均値+0.5SD (3.95)以上を高水準、平均値-0.5SD (3.29)以下を低水準とした。これら自尊心と被受容感の高低水準を2軸とする組み合わせで、4類型を設定した。以下は高水準をH、低水準をLとし、4類型をそれぞれHH, LL, HL, LHと表記する (前は自尊心、後は被受容感を表す)。4類型での自尊心、被受容感の平均値と標準偏差をTable 6に示した。

## 4. 自尊心と被受容感による4群と、ストレス反応、本来感との関連

各群の特徴を明らかにするため、自尊心と被受容感を組み合わせた4群を独立変数とし、ストレス反応の各因子、本来感をそれぞれ従属変数とした1要因分散分析を行った。その結果、全ての従属変数において群間で有意な差が認められ、TukeyのHSD法による多重比較 ( $p < .05$ )を行った。結果をTable 7に示した。

その結果として、ストレス反応の各因子ではHH群では4因子全てで値が低く、LL群では4因子全てで値が高い傾向にあった。HL群では身体的症状が低く (HL < LL)、無力感が高い (HL > HH) 傾向が示された。そしてLH群では、身体的症状が高い

Table 5 各尺度における Pearson の積率相関係数

	自尊心	被受容感	不機嫌・怒り感情	抑うつ・不安感情	無力感	身体的症状
被受容感	.69**					
不機嫌・怒り感情	-.29**	-.30**				
抑うつ・不安感情	-.39**	-.33**	.53**			
無力感	-.35**	-.28**	.41**	.43**		
身体的症状	-.39**	-.32**	.52**	.56**	.53**	
本来感	.70**	.69**	-.19**	-.31**	-.33**	-.30**

\*\* $p < .01$

(LH>HH) 傾向が示された。

本来感では HH 群がもっとも値が高く、LL 群でもっとも低いことが示された。HL 群、LH 群の間に差はなかったが、ともに HH 群と LL 群との間に差が認められ、HH 群と LL 群の中間的な値を示した (HH>HL・LH>LL)。

## 考 察

本研究では、自尊心と被受容感の高低水準を組み合わせて 4 類型を設定し、ストレス反応と本来感との関連を検討した。その結果、被受容感を組み合わせて自尊心の質を区別した群では、ストレス反応と本来感に違いが見られた。同じ水準の自尊心でも被受容感の水準の違いを見ることによって、異なる適応上の特徴をもつことが示唆された。以下に、各群の結果をまとめ、臨床的考察を加えてみる。

### 自尊心と被受容感による 4 群の特徴について

HH 群は自尊心と被受容感がともに高い群である。ストレス反応は 4 因子とも低い結果だった。本来感、つまり自分らしさの感覚も高い。精神的に健康な状態にあると考えることができ、被受容感の高さをともなった高い自尊心が適応的な結果につな

がっている群である。

対照的に、自尊心と被受容感がともに低い LL 群は、他の群と比較して一貫して高いストレス反応を認識し、自分らしさを感じられていないことが示された。精神的な不健康を強く感じている群といえる。

これら HH 群と LL 群の結果は、自尊心の向上が適応を促進させるという、自尊心と適応との関連を理解する際の前提に沿ったものである。

HL 群は、被受容感は低いにも関わらず自尊心は高い群である。防衛的に高く不健康な自尊心 (Baumeister ら, 2003) の抽出を意図した。ストレス反応、本来感との関連では、HH 群と LL 群との違いが示された。身体的症状は LL 群よりも低いので適応的といえるが、無力感や HH 群よりも高く不適応的な面があると考えられる。そして自分らしさの感覚は HH 群と LL 群の中間に位置されていた。つまり HL 群は、自覚するストレス反応の内容に違いがあり、特に無力感の強さが特徴的で、十分に高い自分らしさを感じるには至らない状態であった。自尊心が高くても被受容感の高さを伴わない HL 群では、不適応な面をもっていることが示唆された。榎本 (2001) は、自己中心的で人の気持ちを思いやれない性質を「自己チュー」と表現し、その背景に人と関わる力の欠如や体験の希薄を挙げ、人間関係の乏しさが自己中心的な世界への居直りという行動パターンを生んでいる、と臨床的な考察をしている。ここでいう居直りとは防衛的な対処という意味に解釈できると思われる。人に受け入れられていないという感覚にも関わらず自己を肯定させる HL 群の心理状態は、この自己中心さに近いものと想定していた。無力感の項目から推測すると、「勉強が手につかず、むずかしいことを考えることができない」という高いストレス状態は、人とつながってい

Table 6 4 群での自尊心と被受容感の平均値と標準偏差

	HH (N=133)	HL (N=15)	LH (N=10)	LL (N=106)
自尊心	4.41 (.30)	4.15 (.16)	2.93 (.28)	2.59 (.53)
被受容感	4.38 (.31)	3.00 (.28)	4.12 (.18)	2.82 (.48)

Table 7 自尊心と被受容感による 4 群での、ストレス反応・本来感の分散分析と多重比較

	HH (N=133)	HL (N=15)	LH (N=10)	LL (N=106)	F 値	多重比較
不機嫌・ 怒り感情	4.88 (1.58)	6.40 (3.08)	6.20 (2.15)	7.21 (3.15)	18.08**	HH<LL
抑うつ・ 不安感情	4.60 (1.39)	5.80 (2.62)	6.20 (2.09)	6.72 (2.79)	19.20**	HH<LL
身体的症状	5.59 (1.96)	6.20 (2.36)	7.70 (2.58)	8.09 (2.93)	19.20**	HH<LL HH<LH HL<LL
無力感	5.67 (1.95)	7.73 (2.68)	7.40 (3.53)	8.04 (3.21)	16.78**	HH<LL HH<HL
本来感	4.27 (.48)	3.55 (.60)	3.46 (.62)	2.76 (.65)	136.84**	HH>HL・LH>LL

\*\* $p < .01$  注) 表中の値は平均値 (標準偏差) を示す。

ないことを自己肯定で補償するように防衛した結果で生じる空しさなのかもしれない。

LH群は、自尊心は低いが被受容感が高い群である。自分らしさの感覚はHL群と同様に、HH群とLL群の中間値であり、ストレス反応では身体的症状の高さが特徴であることが示された。高田(1999)は過剰適応について、周囲の人がいいと思うものを取り入れて自分を作り、「自分はこれでいい、このままで価値がある」という感覚を育てることを犠牲にしてきた、と臨床的に考察している。LH群の心理状態は、この過剰適応に類似しているように思われる。周囲への過度の同調で被受容感が高く感じられるが、それが自己肯定を伴わない状態と解釈できるのではないだろうか。過剰適応の子は、言語化が苦手で(中坊, 1998)、身体症状を訴えることが多い(大獄・五十嵐, 2005)といわれており、ストレス反応の身体的症状が高いという今回の調査結果も、これを示唆している。

以上、自尊心と被受容感による4群について、それぞれの適応・不適応の特徴に違いのあることが示された。ストレス反応との関連からHL群・LH群が不適応的であることが示唆された。また本来感との関連でも、HL群・LH群では、LL群よりは高いが、HH群よりも自分らしさが低いことが示され、防衛的である可能性が示唆された。

## 2. まとめと今後の課題

高い自尊心は適応につながるのかという議論について、本研究では、高い自尊心にも適応的なものと不適応的なものがあるという理論に基づいた検討を行った。適応理論の原則という観点から被受容感という指標を自尊心に組み入れた結果、自尊心と被受容感のバランス、つまり適応の折り合いがうまくいっていない者は不適応的な特徴をもつことが示唆された。自尊心と適応との関連を理解するときには、不健康的に高い防衛的な自尊心の存在を考慮することが有益と考えられる。

本研究ではHL群を自己中心的、LH群を過剰適応として臨床的考察を加えたが、これは推論の域を出ていない。高く防衛的な自尊心については、攻撃性が高く(松原・藤生, 2005)、暴力的(Salmivalli, 2001)という理論や報告が多いが、低い自尊心の亜類型については、指摘が少なく理論や報告も一貫していない。井上(1986)は自尊心が低く他者評価の高いという矛盾の見られる児童を、建設的な要求水準が高い適応的な者と考察しているが、木村・宮本(1999)は、仲間からの信頼は得ているのに自己肯定できず過敏な子と、その不適応的

な特徴を報告している。本研究のLH群でも不適応的な特徴が示されていた。高く防衛的な自尊心だけではなく、低い自尊心と不適応との関連についても、その詳細を明らかにする必要があるだろう。

本研究ではストレス反応・本来感という精神的健康を測定する変数を用いて、自尊心と適応との関連を検討した。精神的健康とは本人が主観的に自身の適応を評価するものである。今後は先行研究を踏まえて、他者評価や攻撃性を含んだ行動指標との関連も検討すると、適応を多面的に理解することができ、結果として防衛的な自尊心を持つ者の不適応状態がより明らかになると考えられる。また不健康で高い自尊心の防衛については、実験的手法によってそれを検討した研究(Schneider & Turkat, 1975)もある。適応指標だけではなく、適応・不適応に至るメカニズムの面からも不健康な自尊心の検討をさらに加えることも必要だろう。それによって、なぜ被受容感が低いのに高い自尊心をもつのかという疑問を解明することができるだろう。上記のような課題をさらに検討していくことで、健全な自尊心をもつことができない中学生への心理臨床的な援助に寄与する知見が蓄積されると考える。

## 付 記

調査にご協力いただきました中学校の校長先生、先生方、及び生徒の皆さんに心より感謝申し上げます。

## 引用文献

- Baumeister, R.F., Campbell, J.D., Krueger, J.I. & Vohs, K.D. (2003). Does high self-esteem cause better performance, interpersonal success, happiness, or healthier lifestyles? *Psychological Science in the Public Interest*, 4, 1-44.
- Dubois, D.L. & Tevendale, H.D. (1999). Self-esteem in childhood and adolescence: Vaccine? or epiphenomenon? *Applied & Preventive Psychology*, 8, 103-117.
- 遠藤由美(1999). 自尊感情を関係性からとらえ直す 実験社会心理学研究, 39, 150-167.
- 榎本博明(2001). 「自己チューな子」の心理と行動 児童心理, 55, 1601-1610.
- 本間友巳(2003). 中学生におけるいじめの停止に関連する要因といじめ加害者への対応 教育心理学研究, 51, 390-400.

- 星野 命 (1970). 感情の心理と教育 (一, 二) 児童心理, **24**, 1264-1283, 1445-1477.
- 福島 章 (1989). 性格と適応 本明 寛・依田 明・福島 章・安香 宏・原野 広太郎・星野 命 (編) 性格心理学講座 3: 適応と不適応 金子書房 Pp3-37.
- 井上信子 (1986). 児童の自尊心と失敗課題の対処との関連 教育心理学研究, **34**, 10-19.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005). 自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, **53**, 74-85.
- 伊藤 忠弘 (2002). 自尊感情と自己評価 船津 衛・安藤清志 (編) 自我・自己の社会心理学 北樹出版, Pp96-111.
- Kernis, M.H., Cornel, D.P., Sun, C.-R., Berry, A. & Harlow, T. (1993). There's more to self-esteem than whether it is high or low: The importance of stability of self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 1190-1204.
- 木村正男・宮本正一 (1998). 児童の肯定的自己認知に関する研究 岐阜大学教科教育学研究, **6**, 119-126.
- 北村晴朗 (1965). 適応の心理 誠信書房
- 北山 修・舛田亮太 (2006). 自分がない 北山 修 (監修) 妙木浩之 (編) 日常臨床語辞典 誠信書房, Pp223-224.
- 松原弘泰・藤生英行 (2005). 中学生における自尊感情の不安定さと攻撃性・うつとの関係 上越教育大学心理教育相談研究, **4**, 25-38.
- 三浦正江 (2006). 中学校におけるストレスチェックリストの活用と効果の検討 - 不登校の予防といたった観点から - 教育心理学研究, **54**, 124-134.
- 三浦直樹・原岡一馬 (2002). 中高生における“社会とのつながり”と心理的幸福感の関係 久留米大学心理学研究, **1**, 71-79.
- 宮下一博・小林利宣 (1981). 青年期における「疎外感」の発達と適応との関連 教育心理学研究, **29**, 297-305.
- 宮沢秀次 (1988). 女子中学生の自己受容性に関する縦断的研究 教育心理学研究, **36**, 258-263.
- 溝上慎一 (1999). 自己の基礎理論 - 実証的心理学のパラダイム - 金子書房
- 中坊伸子 (1998). 「よい子」くずしの中学生 滝川一廣 (編) こころの科学78 中学生は、いま 日本評論社, Pp42-46.
- 楡木佳子 (2005). 反社会的憧れを抱く中学生の帰属スタイルと自尊感情 犯罪心理学研究, **43**, 17-35.
- 岡安孝弘・高山 巖 (1999). 中学生用メンタルヘルス・チェックリスト (簡易版) の作成 宮崎大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, **6**, 73-84.
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, **46**, 280-290.
- 大嶽典子・五十嵐透子 (2005). 思春期における過剰適応とその関連要因 上越教育大学心理教育相談研究, **4**, 151-161.
- 落合良行 (1983). 孤独感の類型判別尺度 (LSO) の作成 教育心理学研究, **31**, 60-64.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, N.J.: Princeton University Press.
- Salmivalli, C., Kaukiainen, A., Kaistaniemi, L. & Lagerspetz, K.M.J. (1999). Self-Evaluated Self-esteem, and Defensive Egotism as Predictors of Adolescents' Participation in Bullying Situations. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **25**, 1268-1278.
- Salmivalli, C. (2001). Feeling good about oneself, being bad to others? Remarks on self-esteem, hostility, and aggressive behavior. *Aggression and Violent Behavior*, **6**, 375-393.
- 清水 裕 (1999). 自尊感情の高さと安定性が援助と攻撃性に及ぼす影響 昭和女子大学生活心理研究所紀要, **2**, 1-13.
- 杉山 崇 (2002). 抑うつにおける「被受容感」の効果とそのモデル化の研究 心理臨床学研究, **19**, 589-597.
- 高田夏子 (1999). いい子の悩み - 過剰適応について 鍋田恭孝 (編) こころの科学77 学校不適応とひきこもり 日本評論社 Pp72-75.
- 田中道弘・上地 勝・市村國夫 (2003). Rosenbergの自尊心尺度項目の再検討 茨城大学教育学部紀要 教育科学, **52**, 115-126.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-48.

(受稿3月21日: 受理5月7日)